# 阿部三家

單

H2
41

福山學生會雜誌原稿　第四十九號

寄稿

# 阿部三家

眞田鶴松

大正五年七月十七日従五位伯爵阿部正直公は子爵阿部正功（まさこと）公の御息女直子姫と御結婚遊はされたり眞に芽出たき事なり伯爵の御家は言ふまでもなく備後福山藩十一萬石の城主たりし御殿様の後にして子爵の御家は磐城棚倉藩六萬石の城主たりし御殿様の後なり福山阿部は元其の御本家にして棚倉阿部は其の御分家なりしこたび本分両家の間に御結縁遊はされたることは両家萬歳の基礎なりとや言はん實に中かしき限りなり吾人舊福山藩領域内の者として今や我郷の巨室に此慶事ありしことを歡喜抃舞せずして可ならんや余は此機會に於て

東京帝國大學圖書印

B 23475

H20
4/5

[illegible]以上兩阿部家及ひ別に福山阿部の御分家なる、佐貫阿部家の御系譜等を略叙し、讀者の內、少年諸君に告ぐることゝす。先輩大家之を一讀せられ、[illegible]若し間違へたる點あるを認められなば、[illegible]願くは教へられよ。

阿部正弘事蹟（渡邊修二郎著）以下單に事蹟と記す）に、大日本史を參取して曰く、阿部氏又阿倍に作る、其の先は孝元天皇第一皇子大彦命より出づ、命は開化天皇の同母兄にして崇神天皇の十年四道將軍の一となりて北陸道に赴かる。命の子武沼河別命も亦四道將軍の一にして、東海道に赴かる。武沼河別命の子豐韓別命、大和國十市郡阿部に住す、子孫

十二ノ廿五 松屋製

2 2 純

依て之を氏とすと。

姓氏錄に云ふ、阿倍氏の裔孫、東海北陸陸奥等に居る臣、朝臣を稱する皇別にして、世々陰陽道の家なり。舒明天皇の時、阿倍引田比羅夫、越の國司となり、蝦夷及ひ肅愼を伐つ、云々と。日本書紀に依れは、比羅夫舟師二百艘を率ゐて蝦夷を征し、又肅愼（あしはせ國）を擊ちて大に功あり、とあり。

事蹟に曰く、阿倍氏の後孫忠親に至り、始めて氏を阿部と改め、五郎左衛門と稱し、參河國上野に住す、忠親小田滿知の子忠正を養ひて子となす、小田氏本姓は藤原氏其の先は一條天皇の朝に關白たりし藤原道兼より出づ、八田知家なる者は、源義朝及ひ賴朝に屬し、文武の功勞ありし人なり、滿知は南北朝の時、常陸國小田城主たりし小田讚岐守氏知の弟にして筑後

守[redacted]と稱す、元中六年、小田城陷るの後、其の子忠正と共に、足利氏に仕へ、後參河に移り住み、忠正は、阿部忠親の子となり、名を孫太夫と改め、參河の守護細川讃岐守に屬し、碧海郡城を桑子に築きて之に居る、後同郡小針城を築く、是より阿部氏の本姓は藤原氏なりとするに至れり、忠正別に常陸小田氏と同系なる、宇津彌四郎藤原泰定を女婿とし、其子定知を養ひて子とし、之に參河國上野城を讓り、阿部四郎大夫と稱せしむ、忠正の子、正重は、阿部藏人と稱し、父に繼き、小針城主たり、德川清忠同長親に仕ふ、正重の子、正宗同しく小針城主として、德川信忠及ひ清康に仕ふ、正宗の養子正宣、實は上野城主阿部四郎大夫定知の玄孫、阿部善九郎正俊の子なり、正宣、德川清康廣忠及ひ家康に仕へ、文武の功ありと。



3. 3 出石 旧稿

今藩翰譜、野史、文政五年の武鑑、國史大字典[redacted]事蹟及ひ大正五年改正の華族名鑑等を綜合して、阿部三家の系譜を温ぬれは、左の如し。

## 福山阿部家

今は本郷阿部家(圓山阿部家ともいふ)として、世に稱せらる。

阿部善九郎正俊(まさとし) 參河の人なり。

正宣(まさのぶ) 正俊の子なり。

正勝(まさかつ) 正宣の子なり、初め善九郎と稱し、後善左衛門と更む、德川家康に仕へ、伊豫守に任す、天正十八年、伊豆市原の地五千石を賜はる。

正次(まさつぐ) 正勝の子なり、小字德千代、後善九郎と

稱す、天正十八年、食邑を下總の地に賜はり、父に繼ぎ、徳川家康に仕へ、書院番頭となり、備中守に任す、藩主として阿部家の初代なり、同年冬、總州一宮の地五千石を加賜せられ、併せて一萬石を領す、武州鳩谷に居る、慶長十五年、下野鹿沼の田、五千石を加賜せらる、慶元二回の大坂陣に從ひ、後采邑を累加し、元和六年、相州小田原城に、同九年、武藏の岩槻城に移り、五萬五千石を領す、老中となる、寛永三年、食邑三萬石を加賜せられ行きて大坂城を守り、食邑併せて八萬六千石、(一説に十萬石とあり)となる、正保四年、大坂城中に歿す。



正吉(まさよし)

正次の弟にして、棚倉阿部家の祖なり。

正澄(まさすみ)

正次の子なり、上總の大多喜城に居り、食邑一萬石(或は一萬六千石とも云ふ)なり、早世す。

正能(まさよし)

正澄の子なり出て、棚倉阿部家豐後守忠秋の養子となり、其の家を繼ぐ。

重次(しげつぐ)

正次の子にして、正澄の弟なり、初め三浦重成の嗣子となり、山城守に任す、寛永五年、兄正澄の死するに及び、阿部家に復歸し、寛永十五年、父正次の封を襲

き、對馬守に任し、岩槻城主となり、四萬六千石を領し、老中となる。正保四年、父歿して九萬九千石を併せ領す。慶安四年四月、徳川家光薨するや、其の夜殉死す。是れ第二代の藩主なり。

## 定高（さだたか）

重次の子なり。封を襲ぎ備中守に任す。大多喜の所領一萬六千石を弟正春に分封す。萬治二年歿す。是れ第三代の藩主なり。

## 正春（まさはる）

重次の子にして、定高の弟なり。初め三浦氏を繼ぐ。萬治二年、兄定高の歿するや、其の子正邦幼なり。正春阿部家に復歸し家事を執り、伊豫守と稱し、合封十三萬五千石を領し、岩槻城に居る。寛文十一年兄定高の采邑を正邦に讓り、自ら舊に復し（三浦氏を稱せず）上總の大多喜城に居り、一萬六千石を領す。是れ佐貫阿部家の祖なり。

## 正邦（まさくに）

定高の子なり。寛文十一年、正春の後を承けて岩槻城主となり、初め對馬守に、後備中守に任す。天和元年丹後の宮津に、元祿十一年下野の宇都宮に、寶永七年、備後の福山に移封せられ、十萬石を領す。是れ第四代の藩主なり。

十二ノ廿五 松屋製

正福（まさとみ）

正邦の子なり、封を襲き伊勢守に任す、是れ第五代の藩主なり。

正右（まさすけ）

正福の子なり、初名富之助、封を襲き伊豫守に任し、侍従に任せらる、明和二年老中と為る、是れ第六代の藩主なり。

正興（まさおき）

正福の子にして正右の弟なり、出て、佐貫阿部家因幡守正鎮の養子となり、其の家を継ぐ。

正倫（まさとも）

正右の子なり、封を襲き伊勢守に任し、天明七年老中となる、是れ第七代の藩主なり。

正精（まさきよ）

正倫の子なり、初名運之助、棕軒と號す、

十二ノ廿五 松屋製

封を襲き備中守侍従に任す、文化十四年老中となり、文政六年之を辭す、文政九年歿す、是れ第八代の藩主なり。

正粋（まさたゞ）

正精の嫡嗣なりしが病を以て廢せられ、其の子正耆出て、棚倉阿部家を継ぐ。

正寧（まさやす）

正精の子なり、初名寛三郎、文政九年、又の後を承け封を襲き、初め對馬守に後伊豫守に任す、天保七年、退隠して不争齋と號す、明治三年七月歿す、是れ第九代の藩主なり。

正弘（まさひろ）

正精の子にして正寧の弟なり、初名正

一後劉藏と稱し裕軒と號す、天保七年、兄正寧の讓りを承けて封を襲き伊勢守に任す、天保十四年老中となり、侍從に任せらる、弘化二年、帝鑑の間詰大名となる、嘉永五年封一萬石を加賜せられ十一萬石となる、安政四年、老中在官のまゝ歿す、是れ第十代の藩主なり。

## 正敎（まさのり）

正寧の子にして正弘の姪なり、初め賢之助と稱す、叔父正弘の養子となり、其の封を襲き伊豫守に任す、文久元年歿す、是れ第十一代の藩主なり。

## 正方（まさかた）

正寧の子にして正敎の弟なり、初め鍗次郎と稱す、兄正敎の封を襲き主計頭に任す、慶應三年、福山に於て歿す、小坂山に葬る、是れ第十二代の藩主なり。

## 正桓（まさたけ）

正方の養子なり、初め元次郎と稱す、淺野式部懋昭の三男にして侯爵淺野長勳の弟なり、慶應四年（明治元年）正方の後を承け封を襲き主計頭に任す、是れ第十三代の藩主なり、是より先き、慶應三年德川幕府大政奉還あり、明治元年より同二年に亙り、福山藩は函館の賊徒を征討したる功あり、明治二年、朝廷より、正桓に賞典祿六千石を賜は

る、同年版籍を朝廷に奉還し、福山藩知事に任せられ、以て明治四年廃藩の時に及へり、華族に列せられ、勲四等に叙し、明治十七年、伯爵を授けらる、位階は、累陞して大正三年従二位に叙せらる。

同年八月十九日薨す。

## 正直（まさなほ）

正桓の長子なり、大正三年八月、父薨したる後を承け家を継ぎ、襲爵仰せ付けられ伯爵となる、明治二十四年の生れにして、明治四十四年従五位に叙せらる、東京市本郷区駒込西片町十番地に住す、西片町十番地は俗に之を圓山と呼ぶ、大正五年七月十七日、子爵阿部正功の女直子姫と婚す。

## 忠正（たゝまさ）

正桓の次男にして正直の弟なり、初名元彦、出て、伯爵酒井忠興の養子となる。

以上の系譜に依り、福山阿部家は、阿部三家の総本家なることと明かなり。

## 4 棚倉（白河）阿部家。

今は、麻布阿部家として世に称せらる。

## 阿部善左衛門正勝

参河の人なり、伊予守に任す。

## 正吉（まさよし）

正勝の次男なり、初名善七郎、兄正次と共に徳川家康に仕ふ、元和三年、食邑五

十二ノ廿五 松屋製

千石を賜ひ大番頭となる。

忠秋（たゞあき）

正吉の子なり、初名小平次、幼にして徳川家光に近侍す、寛永元年、家を継き豊後守侍従に任す、同十四年、野州壬生城に治し、五萬石を領す、老中となり、同十六年、武蔵の忍城に移り、六萬石を領す、後食邑累加して、寛文三年に至り、八萬石となる、同六年、老中を辭し、同十一年致仕し、延寳三年歿す。

正能（まさよし）

忠秋の養子にして、實は福山阿部家正澄の子なり、養父の封を襲き忍城主となり、播磨守に任す、延寳元年、老中となり、食邑九萬石となる。

十二ノ廿五 松屋製



正武（まさたけ）

正能の子なり、封を襲き豊後守侍従に任し、尋て老中となる。

正喬（まさたか）

正武の子なり、封を襲き、初め飛彈守に後豊後守侍従に任す、老中となる、忍城十萬石を領す。

正晴（まさはる）

正武の子にして正喬の弟なり、美濃守に任す。

正直（まさなほ）

正晴の子なり、駿河守に任す、子正簡出て、佐貫阿部家を継く。

正允（まさちか）

正晴の子なり、正喬の養子となり、養父の封を襲き豊後守に任す。

正敏（まさとし）　正喬の弟五男にして、正允の養子となる、養父の後を承け、忍城主となり、能登守に任す。

正識（まさつね）　正敏の子なり、父の封を襲き豊後守に任す。

正由（まさより）　紀伊中納言治寶の叔父にして、正識の養子となり、封を襲き、播磨守侍従に任す。

正権（まさのり）　正由の子なり、初名鐵丸、襲封して武州忍城十萬石を領せしか、文政六年陸奥の白河城に移封せらる。

正篤（まさあつ）　白河城主なり

10

正瞭　白河城主なり

正備　白河城主なり

正定　白河城主なり

正耆（まさひさ）　白河城主播磨守に任す、實は、福山阿部家正精の長男、正粋（まさたゞ）の實子なり。

正外　慶應二年、白河より磐城の棚倉に移封せらる。

正静　慶應三年、徳川幕府大政奉還の後、慶應四年正月、移りて白河城に治せしか、幾はくもなく、復た移りて棚倉城に治す、所領六萬石なり。

正功（まさこと）　正春の子なり、萬延元年生る、幼名光之助又基之助と稱し、明治元年十二月正静の後を承けて家を継ぎ、棚倉城主となり六萬石を領す、同二年版籍を朝廷に奉還し、棚倉藩知事に任ぜられ、以て明治四年廢藩の時に及ぶ、華族に列せられ、同十七年子爵を授けらる、東京市麻布區霞町一番地に住す。

昌四郎（きやう）　正功の令嗣なり、明治二十一年生る。

文政五年の武鑑には、武州忍城主阿部鐵丸正權殿所領十萬石と記し、其次位に備後福山城主阿部備中守侍從正精殿御老中所領十萬石云々と記しありて、棚倉阿部家を以て福山阿部家の上に置かれあり、是れ當時千代田の城中にて、棚倉阿部家を上席としたることならん、蓋し其の以前所領増加して十萬石に達せるは、福山阿部家に比し、棚倉阿部家の方先きなりし爲ならんと云ふ、之か爲にや、世間往々棚倉阿部家を御本家とし、福山阿部家を其の御分家なりとし、誤り傳ふるものあるに至れり、然れども、以上兩家の御系譜を對照するときは、福山阿部家正勝公の二子の内、兄正次公は福山阿部家の祖にして、弟正吉公は棚倉阿部家の祖なり、本末の關係は此一事に由りて一目瞭然たるを知る。

## 4 佐貫阿部家。

阿部伊豫守正春（まさはる）　福山阿部家重次の次男なり、慶安四年

兄足高の封一萬六千石を分封せられ、因幡守に任し、上總の大多喜城に治す、萬治二年、一旦宗家に復へり、伊豫守に任せられしが、寛文十一年、舊封大多喜に復し、伊勢守に任し、同十二年城主格となり、新に城を築きて之に居る、元祿十五年、参河の刈屋城に移封せらる。

正鎮（まさたね）

正春の子なり、封を襲き、初め民部少輔に、後因幡守に任す、寶永七年、上總天羽郡（今君津郡）の佐貫に移り、一萬六千石を鎮し、城を築きて之に居る。

正興（まさおき）

福山阿部家正福の四男なり、正鎮の養





子となり、其の封を襲き、初め山城守に、後因幡守に任す。

正賀（まさよし）

正興の舍弟なり、正興の子として養はる、初め名總太郎、養父の封を襲き駿河守に任す。

正實（まさざね）

棚倉阿部家正允の末男なり、正賀の養子となり、封を襲き、兵部少輔に任す。

正簡（まさひろ）

棚倉阿部家駿河守正直の長男なり、正實の養子となり、其の封を襲く。

正嵩（まさあきら）

正簡の子なり、初名鋼五郎、父に継き佐貫城主となる、雁の間大名なり。

正身（まさてる）

亀井家より入りて正嵩の養子となり、

13.13

家を襲き、佐貫城主となる。

正恒（まさつね）
正身の子なり、封を襲き、佐貫城主となる。

正敬（まさのり）
正恒の子なり、父に継き佐貫城主たりしが、徳川幕府大政奉還の後、明治二年版籍を奉還し、佐貫藩知事に任せられ、以て同四年廢藩の時に及ぶ。華族に列せられ、明治十七年、子爵を授けらるゝ、明治四十三年四月歿す。

正基（まさもと）
正敬の子なり、明治三十二年生る、明治四十三年、父の後を承け、家を継き、子爵を襲く、千葉縣君津郡佐貫に住す。



謹て惟ふに、我國の組織は家に重きを置く上　皇室を大本家とし家々榮に来りたる大日本民族なり。國の本は家に在り、吾人の家とても、國家的關係に思ひ及へは、決して軽視すへきものにあらす、況や、孝元天皇の御遠裔皇別なる阿部の御家に於てをや。永久に、　皇室の藩屏として榮にますと共に、舊領域內に對しては、指導模範の巨室たるの實を全ふせられたし。鶴松は、満腔の敬意を以て、阿部三家の萬歳を祈る。

（大正五年七月三十一日稿）

十二ノ廿五　松屋製